国　　語

注　意

1. 問題は全部で22ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし，マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の ◯ を塗りつぶしなさい。◯で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が 1 のとき)

1	● ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり，折り曲げたりしないこと。

一　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

芭蕉の愛好家としてのわたしは、いつも複雑に分裂している。それは俳諧一般についていえることなのだが、とりわけ芭蕉のような詩人の場合に顕著である(蕪村については、それほどでもない)。

一方でわたしは、句が成立した状況や、それが典拠としている過去の詩作品をショウリョウし、できるだけ多くの知識を前提としたうえでテクストに臨みたいと思う。句が表象しているはずの、唯一にして正確な解釈に到達したいという欲望が、この姿勢の背後には横たわっている。だがもう一方でわたしは、そうした起源への意志をめぐる欲望の一切をあえて封じ込め、テクストに喚起されるまま、こちら側の想像力を自在に飛翔させてみたいという気持ちに、強く捉われてもいる。句との関係を真実の審級から解き放ち、水に投じた水中花がしだいに開いていくさまを眺めるかのように、一句が醸し出す[a]曖昧な幸福感を快楽として受け留めておくこと。このいずれの立場をとるかで、ひとつの句がまったく異なった表情を見せるという事態を、わたしはしばしば体験してきた。どちらの立場に身を任せるかは、句によっても異なっていて、これはそれぞれに範疇を構成している。読み手のわたしに最初の立場を求めてくる句もあれば、自然と第二の立場へとわたしを向かわせてしまう句もある。

いささか抽象的な話が続いたが、具体的な句を前にして語っておきたいと思う。まず[b]最初の範疇。

はつ秋や海も青田の一みどり
名月はふたつ過ても瀬田の月
田一枚植て立去る柳かな

最初の句を理解するためには、それが詠まれたのが伊勢湾の干拓地鳴海においてであったことを、「前書」を通して知っておけばこと足りる。少なからぬ俳句があまりの短さと凝縮力ゆえに、前書という名の自己解題を必要としてきた。その意味でこの文

学的ジャンルは、二〇世紀後半の美術作品の、意図せざる先駆者であったといえる。ダリやデュシャンの美術作品と同じく、いずれもが自己言及の言説を内側に含みこんでこそ、はじめて成立するからだ。「鳴海眺望」という前書は、単に付加的なものではなく、[c]句の内側に構造化されたものである。

三番目の句はどうだろうか。柳が田植えをする？　これをもし字義通りに受け取るならば、さながらロートレアモン伯爵の散文詩に似た、超現実主義的光景となるだろう。わたしはそうした荒唐無稽に魅惑されなくもないが、もし謡曲の『遊行柳』を知っていたとすればこの荒唐無稽の映像はたちどころに氷解する。柳の朽木の精が旅の僧の厚情に感謝して舞踊を披露し、心清らかにその場を立ち去ってゆくという物語である。芭蕉が属していた文学的共同体の内部にあっては、こうした先行する文学・演劇作品をめぐる知識は自明のものとされていた。立ち去る者が句の作者である[d]芭蕉本人に他ならないことは、いうまでもない。この共同体から遠く隔たった知的辺獄（リンボ）に生きているわれわれは、まず*インターテクストの網の目を辿（たど）るという努力なしには、句の起源の意図に接近することができない。幸田露伴から安東次男まで、時代ごとに評釈集が執筆され続けてきたことの意味は、ここに存している。

「田一枚」の句がイデオロギー的に顕彰しているのは、永遠の旅人の原型としての芸術家の映像である。主人公とは文学の精霊なのだ。そしてこの句は、『おくのほそ道』というなかば虚構化された旅行記のなかに置かれることで、書物の多層的構造をいっそう強固なものにしている。現実になされた東北地方への旅行は*エクリチュールのための口実にすぎない。芭蕉は杜甫白楽天から定家宗祇まで、先行する夥（おびただ）しい書物の堆積のなかを旅行している。自分が単にある文学作品の作者であるばかりか、文学史そのものの擬人化であるという演劇的自覚において、芭蕉には二〇世紀のボルヘスに似たところがある。彼は死後、単なる俳諧師の域を越え、人生の達人として聖人化されることになった。国民的偉人と見なされ、その霊を祭る神社までもが建てられた。こうした神話化は彼のなかば期待し、予想するところではなかったかと、わたしは少し意地悪く想像している。

だがここで、本稿の冒頭に掲げた[e]第二の範疇を考えてみよう。芭蕉のなかには、詮索を重ねることが詩的興趣の軽減に通じてしまうことになる句が、いくらでも存在している。三世紀半にわたって多くの評釈者、研究者がさんざんに議論を重ねてはきた

ものの、いっこうに究極的な一義的解釈に絞りこむことができないでいる類の句を、試みにいくつか列挙してみよう。

八九間空で雨ふるやなぎかな
合歓の木の葉ごしもいとへ星のかげ
行く春や鳥啼き魚の目は泪

最初の句で、一五メートルに及ぶ空間的拡がりとは、いったい柳の高さなのか、幅なのか。それとも雨の降りしきる範囲なのか。この問題は、いかなる評釈書を紐解いてみても一義的に特定することができない。読む者を強く印象づけるのは、ただただ柳の大木の下にあって曇天を見上げるという身振りである。それはいかなる隠喩化をも拒絶する、作者の身体の現前だ。もしこの句に究極の意味内容があると仮定するならば、それは作者の身体性に帰着することだろう。それ以降は、各人の詩的夢想の跳梁する領域となる。わたしはといえば、細やかに降下する雨粒と柳の枝垂れぐあいの重なりあうさまが、仰角という眼差しにみごとに拮抗しているあたりに、句のみごとさがあると思う。[f]この句は自由に遊ばせておけばいいのだ、という気がしないでもない。明治以降の俳句のモードとなった「写生」という観念を無理やりに適用することは、この句のもつポエジーの枝葉の拡がりぐあい、重なりぐあいをいたずらに撓めてしまうだけのことだろう。

二番目の句はわたしを、芭蕉とその時代という文脈を離れ、西洋文学をも含めたより広い文学的想像力の世界へと連れ出してくれる。ここでも前句と同じく、見上げるという身振りが句の中心にある。『猿蓑』の秋発句の部に置かれたこの句は、芭蕉が直江津に滞在しているときに成立した。越後の地にあっては七夕の際、しばしば合歓の木の小枝を用いるという民俗学的知識が、そこでは解釈の前提とされている。木の葉が重なりあっていると、星の光が隠されてしまう。牽牛と織姫の逢瀬を無事に達成させるには、何を気遣えばいいのか。おそらくこうした軽い気持ちから成立した句なのだろう。

[g]だがここで思い切って、合歓の葉が儀礼として川に流されたものだと、大胆に仮定すればどうだろうか。そのとき「星のかげ」

とは暗い水面に葉の隙間から微かに煌(きらめ)く光と化し、可視と不可視をめぐって、より稀有な情趣を湛(たた)えることになるだろう。

（四方田犬彦『日本の書物への感謝』による）

（注）

＊インターテクスト…間テクスト性。テクストの意味の解釈に別のテクストから得られる知識が必要なこと。

＊エクリチュール…フランス語で、文字や筆記や書く行為のこと。

問一　傍線部a「曖昧な幸福感」とあるが、それはどういう意味か。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 1 。

① 水中花がたちまち閉じてしまうその一瞬の美を味わう感覚。

② テクストの不正確さにいらだちながらもある種の感覚をとらえること。

③ 自由な想像力を働かせることで徐々にその美がわかってくること。

④ テクストに望まれる限りの知識を駆使しながらも十分ではないことを自覚する感覚。

⑤ 俳諧という文学形式の持つ限界を熟知した作者ならではの快楽。

問二　傍線部b「最初の範疇」とあるが、その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 2 。

① 芭蕉の愛好家としての立場
② 複雑に分裂した愛好家としての立場
③ 多くの知識を前提として正確な解釈を得る立場
④ 想像力を自由に飛翔させてみたい立場
⑤ 芭蕉と蕪村とを対比させてみる立場

問三　傍線部c「句の内側に構造化されたものである」とあるが、その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 3 。

① 前書も句の不可欠な一部であり、それ自身がその句を説明している。
② 俳句にかならず前書が必要であることを意味している。
③ 短詩形としての限界を句の内部の充実によって補っている。
④ 五七五という俳句の形式がそれ自体見事な秩序を保っていること。
⑤ 暦などの外部の知識なしに内部の情報だけで解読ができること。

問四　傍線部d「芭蕉本人に他ならない」とあるが、なぜか。その理由として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 4 。

① 芭蕉は後代になって霊を祭る神社まで建てられたように霊的な存在と考えられていたから。
② 文学作品にはかならず典拠があり、それを知っているのは作者自身であるから。
③ 時代毎に新しい知識が必要とされ、芭蕉の時代の常識がこの句には反映されているから。
④ 句の本質に迫るには、その主人公を作者であると仮定する以外にはないから。
⑤ 虚構の主体と作者とが同一化しており、柳でもあり、芭蕉でもあるから。

問五　傍線部e「第二の範疇」とあるが、その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 5 。

① 「田一枚」の句がイデオロギー的に解釈できるとする方法
② できるだけ多くの知識を前提とした解釈を行う方法
③ 読み手としてのわたしに最初の立場を求めてくる句
④ 想像力を自在に用いて読者の自由な発想で読む立場
⑤ 国民的偉人となった芭蕉という固定概念による理解

問六　傍線部f「この句は自由に遊ばせておけばいいのだ」とあるが、その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 6 。

① とりあえず自分の持つ知識の範囲で理解しておく程度で十分だ。
② 放置しておいてよいほどあまり重要度は高くない。
③ 作者の持つ遊びの精神を尊重しておくことが重要だ。
④ 句の持つ様々な可能性を否定しないで、自由に解釈するのがいい。
⑤ 解釈自体を放棄してしまってその論理性を否定すべきだ。

問七　傍線部g「だが」とあるが、ここではどういう意味なのか。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 7 。

① 新たな解釈を提出する「添加」の意味を示している。
② 仮定文の前提としての「留保」の意味を示している。
③ 句の解釈を大きく転換する「逆接」の意味を示している。
④ 思い切った解釈を提出するための「強調」の意味を示している。
⑤ 最終的な結論を導き出す「導入」の意味を示している。

問八　この文章の作者は、芭蕉についてどのような考えを持っているか。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 8 。

① 芭蕉の句の世界は、厳密な読みにも、読者の自由な発想にも耐えうる複雑で多様な構造を持っている。

② 芭蕉の句の世界は、まったく異なる二つの要素が分裂した状態で存在することが好ましい。

③ 芭蕉は日本文学の世界の中でも、西洋文学を含めた広い世界を最初から目指している。

④ 芭蕉は二〇世紀になってから聖人とみなされるようになったと考えている。

⑤ 芭蕉の句の解釈はほとんど無理なほど難解である。

問九　二重傍線部「ショウリョウ」を漢字で書くとき、最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 9 。

① 秤量　② 省領　③ 生霊　④ 渉猟　⑤ 抄料

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

都市を日常的な知覚空間として理解することと、想像力のなかで解読することのちがいが、極端な、しかし比喩的なかたちで対比されている例が、フロイトの『文化の不安』のなかにある。ローマをふたとおりの仕方で記述したところである。彼はふたつの異なる仮定をしてみる。

最初に彼はローマをいま訪れる人間に知覚できる(実体的な)都市と仮定している。ローマは歴史家の研究によって最古のローマ・クワドラタにはじまる長い歴史をもっていることが明らかにされている。フロイトは訪問者が「これら昔の発展段階のうちの何を見出すか」を想像してみる。

アウレリアーヌスの城壁がわずかに破損しているだけで、ほとんど変っていないのを、その訪問者は見るであろう。またところどころで彼は、セルヴィアの城壁の一部が発掘によって露出されているのを見つけることができる。……ところがかつてこの古い外壁のなかを満たしていた建造物となると、彼はそれを何一つ見出さないか、あるいは、わずかばかりの残骸しか見つけないのである。こうした建造物がもはや存在しないからである……。

つまりいま知覚できる都市では過去は消えさった空間であり、それは現存していない。[a]あるのは廃墟であり、あるいは廃墟としてイメージすることができるものである。

次に彼は、「ローマが人間の居住地でなく、同様に長期にわたり内容豊かな過去をもった精神的存在」だという仮定をたててみる。この言い回しはあまり器用とはいえないが、要するに心的(サイキック)な都市のモデルを仮想してみようというのである。この「空想的仮定」のもとでなら、「かつて成立したものは、何一つ消滅していないし、最近の発展段階と並んで昔のそれがすべてまだ存続している」ことが見出せるとのべる。

パラティーン丘の上には皇帝の宮殿や七主の七主館が今でも昔ながらに高々とそびえているし、ハドリアヌス皇帝廟はその外壁の上に、ゴート人に包囲されるまで飾ってあった美しい彫像をいまだに戴いている、等々。ところがなおその上、カファレリ宮殿のある場所には、この建物をとりこわすまでもなく、カピトール丘のジュピター神殿がまた立つであろう……。

フロイトの記述はまだ続くが、要するに、消えてしまった空間がすべて現われてくるような思考法を考えているわけである。面白いことにフロイトはこの「都市」のアナロジーをうまく扱いかね、こんな空想をつづけても[b]「歴史的連続を空間的に表現」することは困難だとして、このアナロジーを打ち切ってしまう。言い換えるならフロイトは心的な都市は思考することはできるが、それを日常的な空間知覚のなかでイメージすることはできないのを知っていたのである。そのようなイメージ(視覚表象)は必要なかった。言い換えれば集団的な記憶とその消滅の両方を同時に都市はもっているということである。したがって、現在のとりとめもなく拡散した都市に比較して、かたちをもち、閉じた空間であった時代の都市を解読する面白さも、たんに廃墟の懐しい安心感に誘われるからではない。それは都市の記憶を思考によってよびさますことが、比較的容易に行なえるからである。都市の原風景、母型、場所などを回復することである。

こうしたまとまりのある空間の端的なあらわれは、堅固に内部を防備し、同時に開口をもつ城壁であるといわれるが、必ずしも実体的にあらわされる必要はない。どんな都市でもそれが閉じているというのは内部と外部の位相的関係をさすだけであり、[c]「外部」なしには都市などというものもありえなかった。都市はいわば外なる「宇宙」の「経験」から自分自身をつくりあげ、一方では人間はもともとは生理的な身体を象徴的に利用してこの構成された空間を理解した。都市をつくること(そのもっとも小さな行為が家をつくること)は、世界を創建することだとエリアーデたち宗教史家は語ってきたが、他方では都市はアントロポモル*フィスムとして理解されるものでもあった。身体と宇宙の二重の象徴表現をもつ例は少なくなかった。しかも外なる自然とちがってそこは集団的な人間の居住地であり、人間的な出来事にもあふれていた。

このような都市を壮大な視野と細部への執着のなかで再現してみせる名著のひとつに、大室幹雄氏の『劇場都市』がある。古代

中国の都市を主題にした同書の序章で大室氏は、幸いにも自分の解読している都市は、歴史上、すでに滅亡してしまった都市であり、[d]「現在の都市にはない明確な対象性」をもつという利点があるとのべている。その利点があったにせよ、大室氏の驚嘆すべき想像力がなければ、これほど確かに、消えさった都市の基底に触れる経験を人にあたえなかったにちがいない。

都市の解読を通じて私たちが理解するのは、それが古代都市であっても一九世紀の都市であっても、その空間を構成している道路や建物の配置、祭りの日の出来事、日々の生活などの細部ばかりではない。P・アリエスが街路と子供の関係を丹念に悪童たちの警察の記録などを利用しながら追っていくとき、浮かび上がるのは[e]一九世紀にはまだ「都市(ヴィル)」があったことである。街路が子供たちを追い払うまでは、都市はざわめいた血が循環する生きた宇宙の混沌と別の秩序ではなかった。それをとりこんで形象化していたものである。細部が明らかになればなるほど、脈絡なく渦まくさまざまな事象が、ある象徴的な体系によって全体として調節され、統合されていることが見えてくる。具象のヴェールを［　A　］かし、都市というかたちをとってはじめて見えてくる無形の知がある。これを宇宙論(コスモロジー)とよんでもいい。この宇宙論を織りこんだ場が都市の原風景であり、個々の都市によってさまざまに異なる多様な要素が立ち現われながら、都市はこの無形の知、混沌と秩序をたえず変換させる形式に統合されていたということでは共通している。神殿や城壁の構築は、「都市」にとって第一義的なのではない。

このような無形の知を前に「原・都市」とよんだが、それは都市が形成される前段階的なものとしての「原都市(プロトシティ)」ではない。その上にどんなに堅固で巨大な構築物がひろがろうと想像力によって見出せる地層である。まだ定住地をもたない人間が大地の上にひとつの領域を描きはじめたときにすでにこの原・都市はうまれていたのである。「原・都市」は自然と文化との対立をうみだすというより、自然を経験する人間の生の形式化であったように思われる。移動する生活の中心に神話的なしるし(例えば斜めに立てられたポール――オーストラリア)が立って空間をうみだすようになり、またマンフォードが指摘しているように、生きた人間の定住に先立って「死者の都市(ネクロポリス)」(埋葬地)が生じ、墓は移動する人間にとって、時をおいて帰ってくる動かぬ目印になることもありえたかもしれない。自然と死は、いまの都市の観点からみると都市の［　B　］のようにも見えるが、その経験によって、はじめて、原・都市の空間はかたちをとりはじめたのである。自然と死、そして性が都市を成り立たせたマ*トリックスであ

る。女性の性的な力、女性による農業の発明などは、狩猟者のとがった武器に象徴される男性的なものよりも根深いということもできよう。「原・都市」は死や性的欲動の空間を、神話的な知のなかに組みこみ、それを大地に象徴的空間として描きだすエクリチュール*から生じていたのである。

このように考えれば、都市はひとつの知の形式であり、したがってそれは、一種の言語活動[f]でもあり、言語活動のタイプの創出やその記号体系としての精緻化は、都市の構造と密接に関連してきた筈である。マンフォードがポリスの形成について、紀元前四、五世紀のアテネにはたしかにアクロポリスの丘の輝きはあったが、崖下の都市はまだ田舎町同然のものであった。しかしそのときすでに都市（ポリス）は、ソフォクレスやソクラテスのような人物に化身してあらわれていたとのべるとき、都市と言語活動（知）の関係を仄（ほの）めかしていたのであろう。

（多木浩二『視線とテクスト』による）

（注）

＊アントロポモルフィスム…フランス語で、擬人化のこと。本来は人間ではない動植物・自然現象・乗り物などを人間に見立てて表現する修辞技法。

＊マトリックス…母体。

＊エクリチュール…フランス語で、文字や筆記や書く行為のこと。

問一　傍線部a「あるのは廃墟であり、あるいは廃墟としてイメージすることができるものである」とあるが、「廃墟」と「廃墟としてイメージすることができるもの」とはどのように違うのか。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 10 。

① 前者は実体的な都市であり、後者はフロイトによる比喩である。
② 前者はローマ時代の都市であり、後者は過去のすべての都市である。
③ 前者は発掘によって発見された遺跡であり、後者はもとから存在する古代の建築物である。
④ 前者は歴史家によって発見されたものであり、後者は一般人が想像するものである。
⑤ 前者は形がかなり残されているが、後者はその知識がないと廃墟であるとも認識できないものである。

問二　傍線部b「「歴史的連続を空間的に表現」することは困難」とあるが、どうしてか。本文の中から読み取れる理由として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 11 。

① 歴史的に順番に存在した建築物を、同じ空間に同時に配置することができないため。
② 消えてしまった空間は二度と再現することが困難であるため。
③ 心的な都市は思考できるが、それを新たなイメージとして表現することができないため。
④ 歴史的な存在はその順番を異なった秩序で表現することによって本来のイメージを損なってしまうため。
⑤ ローマは内容豊かな過去を持っているため、それがすべて現在遺跡として存在するかどうかわからないため。

問三　傍線部c「「外部」なしには都市などというものもありえなかった」とあるが、どうしてか。本文の中から読み取れる理由として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 12 。

① 都市の内部と外部とを確実に分離するものとしての城壁の存在することが都市の都市たるゆえんであったから。
② 世界という外界の秩序があることによって、その全体の秩序をもととして都市が創造されたから。
③ 都市は外部と遮断された人間の居住地であり、その中において種々の人間的な出来事が起こったから。
④ 都市はそれ自体が閉じた空間であり、内部ですべてが充足した存在であるから。
⑤ 世界の中での都市は、城壁に喩えることができるもので、壁の存在が都市の本質であるから。

問四　傍線部d「「現在の都市にはない明確な対象性」をもつという利点」とあるが、その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 13 。

① 現在の都市と違って過去の都市は、古代中国の都市というひとつのプロトタイプがあるから。
② 現在の都市は、鉄道網が充実し、内部と外部とが連関してしまっているから。
③ 歴史上滅亡してしまった都市には、自由なイマジネーションを働かせられるから。
④ 過去の都市は、細部を備えたひとつの体系として思い起こして認識できるから。
⑤ 歴史の中における都市は宇宙的な秩序を保っていたから。

問五　傍線部e「一九世紀にはまだ「都市（ヴィル）」があったことである」とあるが、ここでいう「都市」とはどういう意味か。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 14 。

① 平安京のように街路が縦と横との秩序を持った巨大で整った都市ということ。
② 警察の記録から調査することができる明確な内容をともなった都市の意味。
③ 現在の都市とはまったく異なった存在としての古代的な「都市」ということ。
④ 次の節で述べられる「原・都市」と同じような意味であり、ひとつのまとまりを持った象徴的空間の意味。
⑤ ローマの持つ都市としてのイメージを大切にしなくてはならないということ。

問六　空欄 A には一字の漢字が入る。その漢字として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 15 。

① 犯　② 溶　③ 透　④ 明　⑤ 生

問七　空欄 B にはある単語が入る。その単語として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 16 。

① 自己矛盾　② 同義語　③ 反対物　④ 付属品　⑤ 原風景

問八　傍線部f「一種の言語活動」とあるが、どういう意味か。その説明として最適なものを次の①～⑤から選び、その記号をマークせよ。解答欄番号は 17 。

① 都市における様々な言語活動によって自然と対立するものとしての都市の基盤が確立した。
② 墓地に墓碑銘が見られるように、都市のあらゆる部分に書き言葉による表現が見られる。
③ 神話が古く口承伝承として語られたように、都市も伝説的なものとなっている。
④ 男性と女性とのジェンダー的対立はまるで言葉による論争のようなものである。
⑤ 象徴的な空間として描出するという機能が言語活動と類似している。

三　次の文章は、中国の朱熹（しゅき）（朱子）によって確立された朱子学（儒学の一派）について述べた文章のうち、特にその「気」という考え方について述べた部分である。これを読んで後の問に答えよ。

この世界は気でできている。この気は実は定義が困難な概念である。おそらく近代以前、中国で気の定義が試みられたことは無かったのではなかろうか。気という概念はそれが何か説明するようなものではなく、既に［　A　］なものとして提示され、関心はその気がいかに働くかに持たれている。たとえば気を日本語として定義してみようとしても［　B　］に暮れるであろう。よく気の字が既に含まれた語を用いて気の説明が試みられるが、それでは定義にならない。英訳でも種々のものがあったが、アメリカでよく使用された物質的力（マティアリアル・フォーセズ material forces）にしても違和感を免れない。日本では幸田露伴が気を「におい」と解釈した。露伴はそのにおいとは単なる香臭だけではなく、色の艶（つや）、声の韻、剣の光、人の容（かたち）などもそれであると言う（『努力論』）。やや日本語の「けはい」にも似ていようか。そのものならではの性格を感じさせるものが気なのであって、なかなかカクシン[1]をついている。

その中でイギリスの科学史家のジョセフ・ニーダム氏は、「マター＝エナジー matter = energy」として解釈した。これは、時には物質（マター）、時にはエネルギー（エナジー）として立ち現れるもの、ということである。我々は物質とエネルギーを分けて発想することに慣れているが、これはヨーロッパでも近世以後の考え方であって、それ以前は両者は同じものとして見られ、時に物質として、時にはエネルギーとして捉えられたと言う。

確かに気には物質として捉えられている側面と、エネルギーとして捉えられている側面とがある。たとえば物体はすべて気でできていると朱子学では考えるが、この場合は物質としての気である。また同時に朱子学ではこの世界のエネルギーの働きも気と言われる。人間に即して言えば、肉体は気でできているが、人間が起こす種々の働き、具体的には話したり動作したり思考したりといったこともすべて気と言われるのである。筆者はこれを広義の気と狭義の気として次のように整理したことがある。

「気（狭義の気）」＋（プラス）「質（物質）」＝「気（広義の気）」

「狭義の気」はエネルギー、「質」は物質、「広義の気」はエネルギーであり同時に物質なのである。朱熹は時に「質は気」であると言い、時に「質」と「気」を対置させる。前者は「質(物質)」は「気(広義の気)」ということであり、後者は「質(物質)」対「気(エネルギー)」ということである。

朱熹はどちらかと言えば「狭義の気」の方を問題にすることが目立つ。それは朱熹が「気」に期待したのが、作用や運動の側面だからである。この世界は作用や運動に満ちている。というよりもこの世界は、[2]作用と運動、およびそれをもたらす機能によって個々の事物の意味が決まるのである。

この「気」は陰陽と五行という二つの側面を持つ。陰は静態的、陽は動態的であって、これは関係概念であることが既に指摘されてきた。つまり陰陽はその気がいかなる気と対置させられるかで陰陽配当が変わるのである。朱熹の意を体して筆者なりにたとえてみると、満月は［　C　］ようなものである。それに対して五行は関係概念ではなく、物質的素材の面が強い。五行は具体的には木、火、土、金、水であるが、[3]木は他の四者のいずれと対応させても木であって変わることはない。万物はこの五行が混ざってできている。人間の肉体も、五行の混成体である。

このように朱熹は関係概念と素材の両方によってこの世界の万事万象を説明しようとした。特に陰陽は重要で、このモデルは男女である。言うまでもなく、男は陽、女は陰であって、陰陽の関係に入った時、子供が生まれる。その子供も男女のいずれかであって、かくてかかる出産は限りなく継続していく。このように宇宙に満ちている気が陰陽の関係に入ることで新たな物を生み出し、それがまた次の物を生み出していく。これが「生生」であって、かくて世界全体は限りなく変化していく。

朱熹は気の作用の代表として「感応」と「消長」を言っている。「感応」とは「感(働きかけ)」(プラス)+「応(反応)」であって、男女で言えば、男が働きかけ、それに女が応じて、子供が生まれるのである。これはいわば「作用」である。

もう一つの「消長」は、「消(衰退)」と「長(成長)」である。たとえば春から夏へは「長」であり、秋から冬へは「消」である。気全体は自身のエネルギーにより消長という自己運動を引き起こしていくのである。これはいわば「運動」である。

そして朱熹は「消長」は「感応」の一つであるとする。春は「感」で夏は「応」であり、その夏がまた「感」となり秋が「応」となる。つ

まり「春」によって「夏」が引き起こされ、その連鎖が続いていくとするのであって、これは空間的な「感応」が時間化されているのである。別の面から説明するなら、[4]春から夏への移行というものは無数の感応の集積が全体を変化させているということなのであるから、消長も感応なのである。

（土田健次郎『江戸の朱子学』による）

問一　空欄 A に入れる言葉として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 18 。

①確実　②完全　③単純　④簡明　⑤自明

問二　空欄 B に入れる言葉として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 19 。

①行方　②手段　③途方　④作法　⑤夕陽

問三　傍線部1「カクシン」を適切な漢字で記せ。**解答用紙(その2)を使用。**

問四　傍線部2「作用と運動、およびそれをもたらす機能によって個々の事物の意味が決まるのである」とはどういう意味か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 20 。

① 個々の事物の存在価値は、どれほど大きなエネルギーによって他者に働きかけていくかによって判断されるべきである。

② 個々の事物の存在意義は、それ自身と他者に対して、どのように効果的に働きかけることができるかによって明らかになる。

③ 個々の事物の存在形態は、他者に対してどのように働きかけ、また他者からどのように働きかけられるかによって決定されていく。

④ 個々の事物の存在のあり方は、それ自身のエネルギーによる変化や、他者との関わりによって生み出される変化によって明確になる。

⑤ 個々の事物の存在理由は、それ自身をもともと構成している物質と、そこからの変化を生むエネルギーとによって判明するはずである。

問五　空欄 C に入れる文として最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 21 。

① 雲に隠れれば陰となるが、雲が晴れれば陽となる

② 日に対しては陰であるが、三日月に対しては陽になる

③ 三日月の時には陰であるが、満月の時には陽になる

④ 天頂にある時は陽であるが、山の端に隠れれば陰となる

⑤ 月見をする者にとっては陽であるが、風流心のない者にとっては陰である

問六　傍線部3「木は他の四者のいずれと対応させても木であって変わることはない」とはどういう意味か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 22 。

① 五行の中の「木」は、物質的素材を言う概念なので、火や水など他のどの概念と対置するかによって性格が変わるわけではない。

② 五行の中の「木」は、それ自体が固有の物質的素材なので、火や水など他のどの素材と比較しても混同されることはない。

③ 五行の中の「木」は、それ自身のエネルギーによって万物を生み出すので、火や水など他の物質的素材に働きかけることはない。

④ 五行の中の「木」は、物質的素材の一つなので、火や水など他の素材と混ざり合っても、それ自体の性格が変化することはない。

⑤ 五行の中の「木」は、新たな物を生み出していくもとになる素材の一つなので、火や水など他の素材とは根本的に性格が異なっている。

問七　傍線部4「春から夏への移行というものは無数の感応の集積が全体を変化させているということなのであるから、消長も感応なのである」とはどういう意味か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 23 。

① 宇宙に満ちている気が、自己運動として新たな物を生み出していくことにより、世界は絶えず変化していく。春から夏への移行も、そうした運動の一つなのであり、この世界の万事万象はそのような形でも説明できるのである。

② 世界を構成する物質が陰陽の関係に入ることによって新たな物を生み出し、また消えていく。そのように、春から夏への移行も、夏というものが生み出され、春というものが消えていく現象と考えることができるのである。

③ 世界に存在する無数の物質的素材が、それぞれの持つエネルギーによって無数の自己運動を生じ、それが混ざり合っていくことによって、世界全体の変化を生じている。春から夏への移行とは、そのように見ることもできるものである。

④ 世界中で常に生まれ続けている数限りない変化の連鎖が継続していくことにより、世界全体が限りなく変化していく。春から夏への移行とは、そうした世界の変化の一部を切り取って見たものなのである。

⑤ 春から夏への移行とは、世界全体が自身のエネルギーによって引き起こしている変化であるとも言えるが、それは、世界を構成するさまざまなものが、無数の働きかけと反応を連鎖的に行うことで生じている変化でもある。

問八　この文章の内容に合っているものを、次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 24 。

① 朱熹の気という概念は、物質的な概念と理解されたり、エネルギーを指す概念と理解されたりして、時代によってさまざまな定義がなされてきた。

② 人間の肉体は気でできているという言い方は、気をエネルギーとして捉えた場合の表現であり、朱子学の考え方の一つの側面である。

③ 朱子学の気は、エネルギーを表す概念としての狭義の気と、それに加えて物質そのものをも含む概念としての広義の気として整理することができる。

④ 陰陽という概念は、気の静態的な性格と動態的な性格を対置して、それが関係概念であることを解き明かした、朱熹の思想の中でも重要な概念である。

⑤ 宇宙全体に満ちている気が、働きかけと反応によって消長をとげてゆく、その自己運動こそが、世界の限りない変化を生み出してゆくのである。